

## 〔26〕ベジャール・バレエ『中国の不思議な役人』

### よじれ合う「性」

1994年5月20日 東京新聞 夕刊

ベジャール・バレエ・ローザンヌが今回の来日で上演した『中国の不思議な役人』は、劇的な緊張感と緻密で説得力のある振付によって、強く印象に刻まれる作品だった。

このバレエが初演されたのは今から二年前。バルトークが一九一九年にパントマイムとして作曲したもののバレエ化だが、じつはこの音楽自体かなりの曰くつきの作品だった。というのも、ストーリーが不健全だということ、舞台化は始めから無理だったし、七年後にやつと音楽だけドイツで初演されたが、それも一日で上演停止。結局、作曲家の生存中は祖国ハンガリーでは一度も上演されることがなかった。それでもバルトーク自身はたいそう気に入っていて、老年になっても、この曲の話をする時と機嫌が良かったという。

さてその「不健全な」ストーリーだが、金めあての無頼漢たちの手先にされて客を引く娘のワナに、つぎつぎと三人の男が引っ掛かる。色好みの老人、臆病な若者、そして中国の高官である。彼らはそれぞれに女の挑発に乗ったあげく、無頼漢から袋叩きにされ、むしろ逃げるのだが、ちよつと奇妙なのが最後の中国の役人だ。はじめのうち冷淡にみえた彼が、やがて痙攣的に欲望をつのらせる。それが今度は男たちを刺激し、殺害という極点にむかつて全員を狂乱の渦に巻き込んでいく。ところが役人は、窒息させられても、刺されても、首を吊られても、娘を見つめたまま死のうとしない。最後に娘がかき抱くと、ようやくにして死に至る。この役人の「不思議さ」とは、一種ねじれた欲望の表現と、死んでも死なない不気味さを言っているのだろう。

## 〔26〕ベジャール・バレエ『中国の不思議な役人』

### よじれ合う‘性’

1994年5月20日 東京新聞 夕刊

ベジャール自身の簡単な解説によれば、この『中国の不思議な役人』に振り付けることになったとき、脳裏にフリッツ・ラングの映画『M』（一九三二）が思い浮かんだという。大都会の暗黒街を背景に、幼女連続殺人犯を主人公にした作品だが、よじれて抑圧された性的欲望が異常なはけ口を見出だす精神状況を執拗かつ暴力的に描き出したものらしい。

Mと聞くと、昨年ベジャールが三島由紀夫をテーマに振り付けたバレエ『M』を思いだすけれども、それとは無関係で、映画のMとは「人殺し」というドイツ語の頭文字である。

ベジャールが参考にしたのはこの映画の場面設定と照明・美術などの手法だが、それにもまして不明瞭でいかかわしい性エネルギーが抑えようもなく高まって爆発に至るときの、エロティックでサディスティックな雰囲気である。それはバルトークが生き、ラングが描いた第一次世界大戦後の退廃した時代精神そのものだ。

バレエ『中国の不思議な役人』の舞台では、幕開け、上手からの強烈なライトに照らし出された都会の裏町の男たちの群舞が実に躍動的で迫力がある。彼らに取り囲まれて一人がコートを脱ぎ捨てると、現れたのは濃い口紅と黒く光る短い下着、ストッキングにハイヒールをはいただけの脚。だが、この「娘」を踊っているのは男性タンサーのクーン・オンズィアである。たくましい筋肉を誇示しつつ、腰を落してハイヒールの踵を後ろに跳ね上げ、厚い胸と肩を反らせると、きわめて男性的で同時にきわめて女性的なものが、はちきれんばかりの存在感を持つ。

最初の犠牲者をベジャールは独自の解釈でジークフリートと名づけている。ラングの別の映画（たぶ

## [26] ベジヤール・バレエ『中国の不思議な役人』

### よじれ合う‘性’

1994年5月20日 東京新聞 夕刊

ん『ニーベルンゲン』に出てくる人物だそうだが、腰に獣の皮をまいたこの裸体の男は、まるで神話から抜け出たような時代錯誤の男性美で輝いている。そして「娘」と男同士の筋肉がぶつかりあうバ・ド・ドゥを踊るのだが、その言いがたいなまめかしさを、どう納得したらいいのだろうか。

ついで舞台手前下から現れたハンチング帽の「男」を踊るのは女性ダンサーだ。弱い男のイメージだが、ここでも性はよじれ合う。

そして中国の役人（ジル・ロマン）が人力車に乗って登場する。文化革命時代を思わせる小さなつばの帽子と青い服。手足を硬直させた痙攣的な動きからは、最初エロスは一切消去されているような印象を受ける。しかしそれがそのまま性的な興奮に変わり始めると、もはや止めることは不可能だ。荒くれた男たち、そして下着の女たちの渦巻く群舞のなかで、死んでも死に切れない役人の不思議な断末魔が幼児殺害犯のエクスタシーさながら尾を引いて、ついにこと切れた。

幕が下りると、会場は拍手とブラボーに包まれた。だが、と私は思う、かつて若きベジヤールが『春の祭典』で世界的名声を手にした時のように、怒りのブーイングを溶びせる観客があっても良かったのではないだろうか。このバレエを単なる意匠として拍手喝采する現代とは、いったいどういう時代なのだろう。

音楽的にも『中国の不思議な役人』と『春の祭典』の類似はすでに指摘されているというが、『祭典』で名声のスタートを切ったベジヤールは、今また『中国の不思議な役人』でその原点に立ち返っている。

[26] ベジヤール・バレエ『中国の不思議な役人』

よじれ合う“性”

1994年5月20日 東京新聞 夕刊